

日野啓三・昭和二十七年の文業

山内祥史

はじめに

「(昭和五十七年九月、日野啓三記)」と末尾に記された年譜「日野啓三」(『芥川賞全集第十巻』文芸春秋、昭和五十七年十一月二十五日付発行)の「昭和二十七年(一九五二)二十三歳」の項には、次のような言説がある。

東京大学卒業、読売新聞社入社。地方支局に行つて「新聞原稿を書きまくると文章が荒れると堀田善衛氏から忠告され、外電の翻訳が主な外報部に、外国語能力は最低なのに無理に入れてもらう。この頃から主に「近代文学」に評論、書評を次々と書く。

『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』(東京大学文学部社会学研究室開室五十周年記念事業実行委員会、昭和二十九年八月二十日付発行)所掲の「社会学卒業論文題目」の「昭和二十七年三月卒」の項によれば「日野啓三 戦後世代の研究」^{フレンジール}とある。また、「流動」六月臨時増刊号(昭和五十四年六月二十五日付発行)所掲のアンケート「私の卒業論文」の「日野啓三」の項によれば、題目は「戦後世代の社会学

的考察」とある。この題目は、状況から判断して前者が正しいのであろう。日野啓三「私の卒業論文」には、次のような言説がある。

三年のころ、新進批評家ということで「近代文学」に書いたりしていた。卒論は十二月の末に二週間ほどで二百枚以上書いた。わが生涯で最高の執筆速度と記憶する。自殺した光クラブの学生社長、金閣寺放火事件、愛人の墮胎手術に失敗して殺した九州大学の大学生などのことを書いたと思つているが、確かではない。ただ私も卒論で取り上げた『戦後世代のヒーロー』^{たち}を、その後、三島由紀夫が次々と小説にしているのを知つて、三島氏に強く親近感を覚えたことはよく覚えている。いまま社会学研究室に残つているかどうか知らないが、二度と読み直してみたいとは全く思わない。まあよく卒業できたと感謝している。卒論の口頭試験の時は、すでに就職の決まっていた新聞社の初任給のことなどを、教授たちと話し合った。

昭和二十六(一九五二)年の「三年のころ、新進批評家ということで「近代文学」に書いたりしていた」ために、「卒論は十二月の末に二週

間ほどで二百枚以上書」くという仕儀になったのだらう。ともあれ、右の言説から、日野啓三の卒業論文は、公表されていないと判断される。

管見に入った限りでは、昭和二十七年（一九五二）年に日野啓三は、三篇の書評と二篇の評論とを発表している。それらの昭和二十七年に発表された文章の言説は、昭和二十六（一九五二）年に発表された文章の言説より洗練されて精度を高め、言葉はよりの確に、修辭はより精密に、論理の展開はより巧みになってきて、「文芸評論家」としての風格さえ漂わせ始めているようだ。この年「文学界」十二月号の「新人評論特輯」で、五名の新人評論家の中にその名を連ねたのも、当然であったと思われる。以下昭和二十七年に発表の文業の概要を紹介し、日野啓三の文業の進展の跡を確認したい。

I ジャン・ゲノー著『深夜の日記』

書評の第一は、「ジャン・ゲノー著 内山敏訳編『深夜の日記』」である。昭和二十七年（一九五二）年二月一日付発行の「近代文学」第七巻第二号「Books」欄に掲載された。三段組三頁に亘っている。採り上げられた書の原題名は、*Journal des années noires*。書名の「深夜」noiresとは、フランスがドイツ軍に占領された四年間の、フランスの「街の上」、フランス人の「心の中」に作られた「夜」のことだと、アルベール・カミュの手紙の一節を引きながら、日野啓三は説明する。それは「外なる時代の暗黒の記録」としてのみ受け取ってはならない。「その記述はラジオと新聞をとおしてみた平凡な一市民の偶然的な見

聞」以上を出ないし「反ファシズム」の「アジプロ作品」としては「極めて内容貧しい作品」だといえる。「しかし」と、日野啓三は強調している。この書物を「流行の抵抗伝説の先入観」にとらわれず、「大戦中のパリ」という「時代」「場処」で生きた一人の人間の「内なる誠実な魂の記録」として読むならば、「英雄的」でも「戦闘的」でもない「その表面的な貧しさ」が、「貧しさ故に却って人間的なもの」として、「深い共感」を与える、と説くのだ。

「英雄か、賢者か？ 典型的な人間はそのどちらか？」とジャン・ゲノーは自らに問うて「どちらでもあるのだ。どちらと決めるのが間違っている」と答える。このゲノーの言説を引用して、日野啓三はいう。「人間的であるとはそうした自己に強く誠実であること」だと。日野啓三が「野間宏論」（『近代文学』第六巻第五号、昭和二十六年八月一日付発行）で主張した「主体の真実」ということである。変革は「足許から」「内側から」「自分の内部から」行わなければならない。「過渡期」「後進国」「知識人」という条件の「矛盾」に耐え、その「矛盾」を逆に「生きる」という「覚悟」をした、日野啓三の「覚悟」が表明されている、といつてよからう。「イリヤ・エレンブルグ論」（『近代文学』第六巻第六号、昭和二十六年九月一日付発行）の言説を援用するならば、「西欧的複雑性とソヴエト的単純性——より簡単にイテリゲンチヤ的とプロレタリア的」、さらにジャン・ゲノーの「日記」の言説に做えば、「ソクラテスの精神とレーニンの精神」といったような、自らの中に対立する二つの極を絶えず意識すること、しかも、そのいづれにも誠実であることによつて、決して一方にのみ割切ることを拒むことが大切だと考える。このような時代にあつて、英雄として生きるの

を拒むことは、真に英雄的な努力を必要とし、英雄以上の悲劇的な苦悩を耐えねばならない、というのだ。「イリヤ・エレンブルグ論」で発見した「真空の地点」、稀薄の極限であることによって逆に充実し緊張した場処、「颱風の眼」のような地点で、耐えて生きねばならぬというのである。

ジャン・ゲノーの本質を物語った、彼の「ふと呟くような」一句を、日野啓三は引用する。「私」がたしかに私を悩ます。それはひとつの牢獄だ。私はこの「私」とは別な自分をもっている。現実の恐ろしい素顔を明視するには、「夢の凡てを殺し去つて」自ら真空と化した醒めた精神が必要である。「占領軍の言語を絶する野蛮と暴虐」。だが、占領軍の上官に対し不動の姿勢をとる老軍夫を眺めて、彼は「まったくひとりぼっちで、あきらめきつて、絶望的なようにみえる」と書き留める。また、マキに加わつて戦う「死を覚悟した愛する若者たち」について「自由のために死ぬ覚悟がない限り、自由は存在しないことを理解した」と書いたあと「しかし彼らが後に残したもの」は「悲惨や恥辱」であつて、「魂は悲しみ汚れた肉体をもともない、この肉体をも救わねばならない」と付け加える。ゲノーの「魂の内なる分裂は更へのぞみ少い暗黒であつた」と、日野啓三はいう。「外なる暗黒」は、四年をもつて終わつたが、「彼の内なる深夜」は明け初めはしない。彼にとってこの「深夜」は「二重の暗黒」を意味した、というのだ。

しかし、この日記を正しく理解するためには、検閲を恐れて書かれていない事実を知つておく必要があると、日野啓三はいう。彼は「国民作家評議会」のメンバーで「自由思想」の発刊にも参画し、日記の一部は「深夜叢書」の一冊になつた。だが、ジイドやヴァレリイ、モ

ンテルランのように、ドリユ・ラ・ロシエル編輯の下に御用雑誌として再刊された「NRF」には寄稿せず、公の出版は拒否し、高等師範の教師としては圧迫と危険との間で人間の自由と偉大さとを説き続けた。ゲノーの魂の中から「理想の燈明」は完全に消えていたためである。彼は、市民としてできるだけの抵抗を躊躇したのではなく、「彼の内部のレーニンとソクラテスの対立、或はマキの英雄達とドイツ兵の中にさえ人間をみる立場にあつての分裂」そのいずれをも「余りに強く欲する故に止むなく取らねばならなかつた姿勢」が、この日記を繙くとき「ぼくらの前に現れる彼」だという「そうした危険な形ではかこの世界の上には現象しえない彼の魂の余りにも人間的であることを欲するが故の苦悩と焦燥とそして孤独」。それが「日記」を通して流れる主調音であるというのだ。この「正しい事情を正しく理解せねばならない」と、末尾で日野啓三は次のように主張している。

ジャン・ゲノーという誠実故に不幸であつた一人の人間のために、又苦しく危険な状態の中で書きつがれたこの貴重な書物のために、そして嘗つてのフランスに劣らぬ不幸な時代を生きねばならぬばかり自身のために、更に彼が身を以つて守つた人間の凡ゆる悲惨と苦悩を容認しないという真の人間的な立場、言葉の正しい意味に於いてヒューマニズムの信念のために、である。

日野啓三は、この書を通して「こうした困難な時代に於いて、誠実とはどういうことであるかということ、又人間的であることの意味」を学んだという。前年の「野間宏論」(前掲)「イリヤ・エレンブルグ

論」(前掲)「堀田善衛論」(「近代文学」第六卷第八号、昭和二十六年十二月一日付発行)で「新しいヒューマニスト」はいかに在るべきかを模索していた日野啓三にとって、ゲノーの日記は、貴重な示唆を与えてくれる書であつたといえよう。「生きるか否かの極限で、生きる方に賭ける、一種非人間的なまでの意志」をもつ「新しいヒューマニスト」を、日野啓三はゲノーの中に見たのであろう。

II 李広田作『引力』

書評の第二は、「李広田作 岡崎俊夫訳『引力』」である。昭和二十七年(一九五二年)七月一日付発行の「近代文学」第七卷第七号の「Books」欄に掲載された。三段組二頁程の書評である。

劈頭、日野啓三は、「今まで全然」中国の小説に接していないので、「少なからぬ期待をもつてこの書を繙いた」が、読み終えて「失望の念を禁じえない」と述べている。「新しく教えられること」も「親しく共感する点」もなく、「読む前の私」と「読み終つてからの私」との間にいささかの変化もなく、「何ひとつ残っていない」という。「この作品の意義は」といえば「私と何も共通項をもたないという点にある」というのだ。

筋は極めて簡単である。日野啓三の要約を引用すると、次のようになる——「中産階級に属する一人の女教師が日本軍占領下の生活には反発しつつも、非占領地区にある夫からの誘いに応ずる決心がつかないでいるが、そのうち子供と一緒に占領区を脱出して非占領区に行つてみると(といつても殆んど汽車旅行である)夫は一日ちがいで解放

区へ去つた後であつたという話」だ。

訳者岡崎俊夫「あとがき」の「日本の統治に対する中国民衆、とくにインテリゲンチヤの抵抗を描いた名作とうたわれた」という一節を引用し、日野啓三は、「インテリゲンチヤの主要な属性のひとつを批判精神」とみるならば「主人公の女教師夢華」の眼は「われ／＼の考えるインテリゲンチヤの眼とは無縁」であるという。さらに「思考に裏づけられた心理は凡て手終の形をとつて」いて、夫と夢華とが「抵抗」というものについてどう考えているか」ということは「軽く流されて」いる。「日本軍の暴虐さ」も「間接話法の説明形」になつていて「具体的な直接描写」は少ない。「作者のそのひとの眼の構造」が「複眼ではなく単眼的」である、というのだ。前のジャン・ゲノーの『深夜の日記』の「眼」と比較して、日野啓三には痛切に感じられた相違点である。「この手放しの単眼的眼球は」と、日野啓三はいう。「中国でインテリゲンチヤと自他ともにゆるしている人々」或いは「中国全体のある資質を示している」と。とにかく「インテリゲンチヤという言葉」から自然に表象する「人間像或は世界像」からそれは余りにも遠い、というのだ。

「作者後記」に記されている、「自然と和解除し、未来と和解除する美しい魂の抒情」である「作者自作の詩」の一節を引用し、日野啓三は、この書を通して流れる「感情の波動」が、「村落共同体時代の残照であるのか」「無階級社会からの曙光であるのか」「私はしらない」といい、われわれ「自然との交感を失つて久しい人種」が理解するには「彼等は余りにも右いのか、余りにも新しすぎるのか」という。結論として、日野啓三は「インテリゲンチヤとか、レジスタンスとかの先入見なし

に虚心に読むことが大切であるが、虚心に読んだとて余り結果は期待しない方がよい小説であろう」というのだ。「後進国」「過渡期」「知識人」といった問題に真剣に取組み、「新しいヒューマニスト」はいかに在るべきかを模索していた当時の日野啓三にとっては、当然の言説であつたのだろう。

Ⅲ 除村吉太郎編『ソヴエト文学史』Ⅰ・Ⅱ

書評の第三は「除村吉太郎編『ソヴエト文学史』Ⅰ・Ⅱ」である。昭和二十七年（一九五二）年九月一日付発行の「近代文学」第七卷第九号の「Books」欄に掲載された。三段組で四頁に亘り、この年の三篇の書評のうちでもっとも長い。高等学校時代に第二外国語がロシア語で、一時期日本共産党員になつた経験をもつ日野啓三にとつて、この書は格別に興味深いものであつたのだろう。

劈頭日野啓三は、「公式的といつて軽蔑し、独断だといつて眉をひそめる。しかし正しく公式的に割りきられた公式の、確信をもつて独断された独断の美しさというものが確かにありうるのだ。」といい、「開巻数頁を「また例の！」の舌打ちしながら開くであろうきみも、読み終えて最後の頁を伏せるときには、心中すがすがしい一陣の涼風の吹きぬける想いを感じるに相違ない。」と述べている。読者にこの書を薦める、巧みな導入といつてよい。

次いで、テーヌの『文学史の方法』を援用しながら、批評家にとつての誘惑的な夢である「真実の文学史の記述という事業」について論じる。「真実とは客観的なるものの謂い」であり、「客観的眞実」とい

う悪魔の祭壇の前」で壮麗な夢を追うという、己が信仰心の崇高さに感動していた。だが、「夢は畢竟夢にすぎず、信仰はついに信仰でしかない。もしかすると『客観的眞実』などというものは、「あるのかないのか」判定しがたく、「なくとも一向に困らないもの」だと、日野啓三はいう。問題は、「よく『客観的眞実』の尻尾を掴え得ているか否か」よりも、むしろ「対象を組伏せる精神の姿態そのものの眞実さ」にある。「美しい独断」という言説が使用される所以で、日野啓三らしさの強く感じられる論法といつてよい。

かくして、「この書物の独断」が、「目次」に依りながら紹介されるのだ。この書は全七篇から構成されている。『ソヴエト文学史』という題名から、当然期待されるソヴエト文学の歴史的記述は、全七篇のうち第四篇一篇だけで、全体の七分の一にすぎない。これは「客観的ではない」というかもしれないが、編者の言葉に依れば、「ソヴエト文学發達の道」についての従来の日本での紹介の「共通の缺点」である「十九世紀の批判的レアリズムからバトンをうけついで社会主義レアリズムの創作方法を創始したゴリキーを祖とする人民の文学の大道を展望する」という見地」を堂々と提出することに主眼がおかれているためだといふ。

本論最初の一篇は、「大道」の「祖」ゴリキー一人のために捧げられている。「散文のゴリキー」に第二篇を、「詩のマヤコーフスキー」に第五篇をと、「巨星の前には、他の諸星は残りの七分の一の空間に追いつこめられ、更に雑階級的或はブルジョア色がかつた他の星層は全くその色を失うに至」つていふ。この編成を日野啓三は、「大層自然な道理だ」といふ。「革命前の文学史」から「ロシア象徴派の活動は除外」

され、アルツイパーシエフは名前さえ触れられず、クープリン、アン
ドレーエフは「戯画的に卑小化」され、革命後の諸作品は「軽く無視」
され、「夫々の偏向理論」が入り乱れて争つた「苦難の論争時代」は「冷
やかに黙殺」されている。「見事にも統一された編集方針の貫徹」だと
いう。

その編集方針の「根底」には「もし私の生きているのが唯自分自身
のためだけであるならば、私は何のためにあるのか」という「ロシア
の古い諺の論理」がおかれていた。その論理は、当然「自分の力」を
「高貴の目的」のために、「人民への奉仕のために捧げる」のが「ヒュ
ーマニズム」であるという「断定」に繋がる。「ヒューマニズム」と「反
動勢力の壊滅」とのために「世界文学の前衛部隊」という使命感に燃
えていない文学は、「ソヴェト文学史」の一頁を与えられる資格がない。
「人民への奉仕」以外に「私は何のためにあるか」。この論理に対して
日野啓三は、次の二つのことに考え及ぶ。第一に、この美しい独断は
どこから来たか。第二に、いかにしてわれわれも美しい書物を書き得
るか。この問題について、日野啓三は次のように答える。

第一の「この書の独断の美しさ」は、「ソヴェト自体の社会主義的発
展の力と成果の美しさ」とである。「革命を成就し、五カ年計画を戦い、
独ソ戦争を勝ちぬいて今日のソヴェトを築きあげた彼等ソヴェト人た
ちの創造する情熱と精神の美しさ」であるというのだ。

第二の「われ／＼自身の問題」は、「当然」第一の問題とつながって
くる。「今日のソヴェト」は、「ロシアの人々がデカプリストの乱以来
自分と他人の血を流し、自分と同胞の命を懸けて創りあげたもの」で
ある。また「今日のソヴェト文学」は、「プーシキン以来幾多の天才た

ちが己がこの世の平和と命数を賭けて創りあげたものだ」という。「社
会主義」は「ソヴェト人にとつて過去の創造の結果としての現在」だ
が、「われわれにとつてはそれは現在の創造の結果としての未来」に属
する。「自らの現在を創造するためには、過去を破壊し、他人の創造を
否定するという反語的覚悟をせめて一度は己が精神に課してみること
が或は必要なかもしれぬ」という。「創造する精神の姿態のみが美し
く、そして「創造とはあくまで創造であつて模倣ではない」と、日野
啓三は「自身にひそかに言いきかす」のである。

IV 「現代の《人間の条件》」

評論の第一は、「現代の《人間の条件》」である。昭和二十七年（一九
五二）年五月一日付発行の「現代文学」第四号に掲載された。この評
論については、既に拙稿「現代文学」誌上の日野啓三（近代文学試
論）第四十七号、二〇〇九年一月二十五日付発行）で紹介している。
ここでは、その要点だけを示しておこう。

この評論で日野啓三は、「ぼくらに必要とされること」は、「ぼくら
がぼくらの眼でぼくら自身の周囲をみまわし」、「そこで明らかにみた
ことをぼくらの能力に応じて確実に実行にうつすこと」であつて、「一
切はそこから始る」と主張している。日野啓三の文業の核心となる基
本姿勢が形成された、重要な評論であつた。その後の彼の文業は、こ
の方向を實踐していくことによつて、その感覚に磨きがかけられ、輝
きを増していったように思われる。この評論の後に発表された書評「李
広田作『引力』や「除村吉太郎編『ソヴェト文学史』I・II」などは、

この評論で示された基本姿勢の実践的成果であった。

特に、日野啓三は、『ソヴエト文学史』を読んで、ソヴエトの「ヒューマニズム」を踏まえた「創造する精神」に、強く心を惹かれた。この「世界」において重要なのは、「客観的真実」や「模倣」などではなく、「他人の創造を否定」するという「反語的な覚悟」をもって「自ら現在を創造する」という、「創造する精神」で、その「創造する精神の姿態のみ美しい」と自覚するのだ。日野啓三を「日本」の「新しいヒューマニズム」の「創造」の模索へと導くのは、この自覚であった。

V 「虚点という地点について」

評論の第二は、昭和二十七年（一九五二）年十二月一日付発行の「文学界」第六卷第十二号の「新人評論特輯」欄に掲載された「虚点という地点について―荒正人論―」である。特輯欄の「目次」を掲げると、次のようだ。

新人評論特輯

近代文学の骨格	進藤 純孝	(6)
宗教と文学	佐古純一郎	(14)
記録の仮構との間	服部 達	(20)
平衡操作による文学	奥野 健男	(28)
虚点という地点について	日野 啓三	(37)

当時新しく活躍し始めていた評論家たちが名を連ねている。生年年

齢順では、佐古純一郎大正八年三十三歳、進藤純孝、服部達大正十一年三十歳、奥野健男大正十五年二十六歳、日野啓三昭和四年二十三歳で、日野啓三が最年少であった。

日野啓三の最初の著書は『ベトナム報道 特派員の証言』（現代ジャーナリズム出版会、昭和四十一年十一月十五日付発行）である。そのあと相次いで「評論三部作」が上梓された。三部作のうち『存在の芸術―廢墟を越えるもの』（南北社、昭和四十二年十一月二十日付発行）では「芸術論の原理的試論」を、『幻視の文学―現実を越えるもの』（三一書房、昭和四十三年十二月二十日付発行）では「純粹に文学的な作品論・作家論」を中心にまとめたのに対し、『虚点の思想 動乱を越えるもの』（永田書房、昭和四十三年十二月二十五日付発行）では、「広義の思想的エッセイ」を集めたという。「文学界」に掲載されたこの評論は、「虚点の思想―動乱を越えるもの」の「第二部 虚点の黙示録」の巻頭に、「荒正人論―虚点という地点」と改題しその「I」として収載された。これまで日野啓三が公表してきた文業のうちで、著書に収載された最初の評論であった。

拙稿「現代文学」誌上の日野啓三（前掲）や「近代文学」誌上の日野啓三―一九五一年まで―（「近代文学試論」第四十八号、二〇一〇年一月二二日付発行）などで紹介してきた評論での論点が、「文学界」という晴れ舞台を得て、改めて問い直され深め広げられ、もう一度掘り下げられた力篇で、自他ともに評論家日野啓三の出世作と認められている評論といつてよい。

日野啓三は「現代文学とは何か」（「現代文学」第二号、昭和二十六年七月一日付発行）で、「目的のために手段をえらんでいられる余裕あ

る幸福な時代は終つた」といい、「いづれか一方に立ち、その立場のみを絶対とすることによつて他を否定することをしないとせずぐれて主体的な決意」が「現代文学の根拠だ」と説いた。また、「如何に生くべきか」（『現代文学』第三号、昭和二十六年十一月二十日付発行）では、「目的の絶対を説くコミュニズムと手段の純粹に固執せざるをえないヒューマニズム」という現代の背理のままに生きるべきで、「如何に生きるべきか」といつた問いが無意味である、という意味、これが現代にも文学が成立しうる根拠だと説いた。それら言説の延長上から、「虚点」という地点について「荒正人論」の言説は始まる。

「一般に精神の義務」は、「出発点と到達点」の二点を、直線をもつて直結することにあると信じ、すべての文学者は、ひたすら到達点を指示することによつて、「いかに生くべきか」の問いに明瞭な結論を与えるよう努力すべきである、それが「時代に対する精神の誠実の證し」である、と日野啓三は考えていた。そのような彼の眼には、「近代的自我の確立」を説きながら同時に「エゴイズムからの脱出、ヒューマニズムへの変貌」を主張する荒正人の「精神の所在」、また、目的のためには手段をえらばぬ「政治至上主義」を鋭く批判しながら、手段の純粹に固執して変革を否定する「非政治主義的文学精神」をも批判する荒正人の「不可解な姿勢」は、精神の不誠実の證拠とさえ感じられていた、という。

しかし、荒正人は、じつは「時代の現実を誰よりも痛切に知つていた異常に誠実なリアリスト」であつた。人間にとつて大切なのは、「到達点」ではなく、「出発点」から「そこに至る過程そのもの」である、と日野啓三はいうのだ。「出発点」と「到達点」との「中間をなす地点」

を、彼は「虚構的 imaginary な地点」と名づけ、「自らをその地点に位置づける精神の異常な緊張自体」が大切だといふのである。これは「除村吉太郎編『ソヴエト文学史』I・II」の書評で、「創造」する「過程」の「精神の姿態」の「美しき」に惹かれた、その延長上の言説といえるだろう。また恐らく、創造する精神の緊張自体を重視し、作品をその残滓とした、小林秀雄の言説に学んだものでもあろう。日野啓三は、実数 real quantity とともに虚数 imaginary quantity の存在を認める数字の公理を踏まえて、「出発点」「到達点」を「実点 real point」とすれば、その二つの地点の中間の「第三の地点」は、「虚点 imaginary point」と呼ぶことが許されるだろうといふ。後に彼は、「いわば反現実的現実主義ともいふべきそんな背理的な、立場なき立場」が「虚点」といふ言葉に結晶した。苦しまぎれの私の造語である。」と述べている。

日野啓三によれば、荒正人は、「エゴイズムとヒューマニズム」「実存的関心と社会的関心」「夜の意識と昼の意識」「文学と政治」といったような、ふたつの極の中間に、緊張した状態で双方からひかれていくという。「ヒューマニズム、社会的関心、連帯の意識」が「到達点」ならば、「エゴイズム、実存的関心、孤独の意識」をも「出発点」として確認しなければならない。「到達点への飛躍」は「出発点での低迷」と同様の「逃避」である。荒正人は、「単純なエゴイスト」でもなく「素朴なヒューマニスト」でもない。「エゴイストでもありヒューマニストでも」あつた。「現代」における凡ゆる価値と理想の対立において、荒正人はいずれの一方の極にも自らを割切らず、自らそのまま両極の緊張関係自体であつた、といふのだ。もし「現代の現実自身が対立する

理想の相争う巨大な坩堝」だとすれば、彼は最も現実的な場に生きたことになり、彼の論理の矛盾はそのまま完璧なレアリズムであったこととなる。日野啓三は、自分のいう「虚点」とは、それ以外の意味をもたぬという。

例として、「スラヴ派と西欧派」の対立の間に位置して、「ラスマールニコフ」ともソーニヤ・マルメラードワを「キリーロフと並んでシヤートフを」「イラン・カラマゾフと同時にソシマ長老を」立派に描きえたドストエフスキーと、「虚無と無限」の間の「深淵」に臨んで「人間の悲惨と偉大」を結論し「人間の魂の偉大さはいかにして中間にとどまるかを知ること存する」(Penseses 376)と書いたパスカルとの二人を挙げる。荒正人とともに、つねにドストエフスキーやパスカルへの関心と理解とを持ち続けていた日野啓三は、十九世紀的な「西欧的ヒューマニズム」とでも名づくべき、あまりに「人間的臭氣に浸し尽くされたもの」の奥に、ドストエフスキーやパスカルの暗示した根源的に新しい次元の姿と問題、来るべき世紀の予兆、絶対的に総体的なもの、「存在すること自体の秘密」に未来的な新しさを予感し、それを摸索しようとするのだ。「井戸の底からは地上ではみえぬ昼間の星がみえる」というアイソツポスの比喻を引用して、日野啓三はいう。「何故彼は井戸の底に降りねばならなかつたのか」どのような事情が彼にそうした場処を必至としたのか」と。

「過渡期」の「古い夢と新しい理想の過渡的相剋」、「後進国」の「近代に迫りつくことと近代を追い越すこととの目標の二重性」、「知識人の「中間階級として自らの内部に反映される階級対立」——これらの次元を異にする現実の三つの層に共通するものは、「ひとすじの断層」

であると、日野啓三はいう。そうであるなら、この断層の上に自らの生存を根拠づける覚悟をすることが、現代にレアリストたる資格である。荒正人の「希望」とは、この「稀有の時代」の「絶望を生きるという希望」であつた。彼には、自ら断層の底に身を横たえて、自身身を橋と化し、そのような自分を見詰めてたじろがぬ明哲な自意識があつた、というのだ。

昭和初年代荒正人は、プロレタリア文学運動の熱心な使徒で、「民情主義」(ナロドニキ)「自己犠牲」「同志愛」の「信仰」を守つて、ファシズムに抵抗した。その彼の魂を黒い錆から防いだのは、「民衆ではなく自分への愛情」「ヒューマニズムではなくエゴイズムの信念」「史的唯物論ではなく人間の発見」であつて、それらが彼の良心を守り、戦争への孤独な抵抗の支柱となつた「自我」を自覚させたというのだ。日野啓三の言説によれば、「彼の場合、自己自身に忠実であることが社会的に誠実であることに外ならず」「抵抗の信念を生きることはそのまま自己を裏切らぬことであつた」とあり、次のような分析を示している。

あくまでひろく民衆の幸福を守ろうとする遠心力と、どこまでも己が孤独の意志に誠実であろうとする求心力と、この方向相反するふたつのベクトルが互いに他を否定しようとして引きあう緊張の合成力としての自我——純粹の矛盾がそのまま完璧の統一であるという己れの自我の逆説を彼はプロレタリア文学運動と戦争と二つの時期を誠実に生きぬく事によつて自覚したのである。

「神」に対する「虚心の帰依」を失つた現代において、「真実」とは、

「人々」に対する「虚心の帰依」と「自分自身」に対する「虚心の帰依」とのふたつしかなく、唯ひとつの「誠実さ」とは、その両者にとっても「誠実」である以外はない。日野啓三の言い方でいえば「ふたつの実点の間の虚点」で自らがあるとき、その時だけが「誠実」という「精神の状態」であり、その「状態」は「相対立する契機を内に含めて緊張する」状態であつて、これが、荒正人が「戦争の中で自覚した彼自身」だといふのである。荒正人の「批評文学」は、その「自我」の矛盾を確認する操作から始まつた。日野啓三によれば、「人生いかに生くべきか」の探究こそ、「批評の課題である」とする荒正人の「批評作品」を批評するには、彼の生の必然的な帰結点であることで彼の文学の当然の始発点であつた「虚点」の解明こそが大切だといふのである。

「虚点」とは、実際には存在しないが有りうる点だとすれば、「非在」が「存在」に化す秘密は何かといえ、**「創造」**である、と日野啓三はいう。「創造的精神」とは、分裂を強いる現実**に唯誠実**に対決して生きることによつて、己が自我の分裂と矛盾を逆に**創造の契機**たらしめるという逆説的覚悟の事で、「創造的自我」とは「虚点と化した自我の謂」だといふのだ。日野啓三は、荒正人の「批評作品」から、「過渡期」「後進国」「知識人」という悲劇的な矛盾も、自らその矛盾と化する覚悟があれば逆に**創造の契機**となしうるといふ、日本での「現代における創造」の「仕方」を学んだようである。

むすびに

「文学界」昭和二十七年十二月号の「新人評論特輯」に、「虚点という地点について」を掲載したことは、日野啓三を次の飛躍へと導くことになつた。『芥川賞全集第十卷』所掲の年譜「日野啓三」（前掲）には、次のような言説がある。

昭和二十八年（一九五三）二十四歳

「文学界」編集部が呼びかけた、新人作家・批評家の「二二会」という集まりに、奥野健男、服部達、進藤純孝らとともに招かれる。安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫ら「第三の新人」作家たちとも知り合つたが、若過ぎて気おくれし、深くは付き合わなかつた。

昭和二十九年（一九五四）二十五歳

奥野健男と語らい、立場を越えた新しい評論同人誌を計画、服部達、村松剛、吉本隆明、佐古純一郎らの若い評論家のほか、島尾敏雄、遠藤周作、山口瞳、清岡卓行らにも呼びかけて「現代評論」を出した（ただし2号で終わり）。

昭和二十年代終わりの頃日野啓三は、「初期の『政治と文学』のテーマ」を集成していつた。その後昭和三十年代に入ると、やがて「存在論と現代芸術の実験」の問題に関心を深めていくのである。

『虚点の思想―動乱を越えるもの』（前掲）の「第二部 巻頭の『荒正人論―虚点という地点』に「II」として収載された、「荒正人論」（『新選現代日本文学全集38』筑摩書房、昭和二十八年七月十五日付発行）で日野啓三は、荒正人について「彼はつねに、人間が人間であること

の苦悩と誇り、絶望し希望する人間の最も根源的な力の擁護者であり鼓吹者であった」とする一方で、荒正人の「人類の精神が根本的に変わらねばならぬ」という言説に関して「どのように根本的に変わるのか」と設問。「意識の場」を「全宇宙にまで」拡大し、「そのような場の中で新しく人間存在とその営みを捉え直すこと」が必要だと、「意識の変革」の必要性を主張している。その変革は、「西欧的ヒューマニズムとでも名づくべきもの」の根幹にある、宇宙における人間の位置に関する意識の変革に通じるだろう。たとえば「考える章」の比喩（*Pensées* 347）に見られる宇宙と人間、客体と主体の対立という根本装置が彼の内部で崩壊し、宇宙に対する人間的優越の影が彼の眼から消えたとき、彼は万有の根源に「存在と無」を見るのである。

（やまのうち しょうし）